

# 京都府下における椀形須恵器の基礎的研究

－ 6・7世紀を中心として－

名村威彦

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



# 京都府下における椀形須恵器の基礎的研究

－ 6・7世紀を中心として－

名村 威彦

## 1. はじめに

「椀」と呼ばれる須恵器は生産時期から大きく二種類に分けられる。1つは5世紀代に生産され、「カップ形」とも言える形態をした須恵器(図1左)、もう1つは6世紀後半以降に生産され、「皿」とも呼ばれる須恵器である(図1右)。

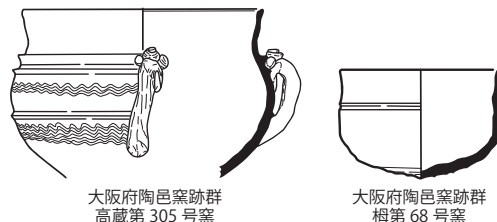


図1 椀形須恵器

れも椀形須恵器と呼ばれるが、両者に系譜的な連続性がないことが明らかとなっている。<sup>(注1)</sup>

本稿で対象とする椀形須恵器は後者であり、脚台をもつ資料も含める。椀形須恵器は、仏具等にみられる金属製容器の模倣土器として捉えられることも多く、仏教伝来を始めたとする6世紀後半の歴史的背景や、7世紀代に成立する金属器志向の土器様式の中に位置づける特徴的な器種である。本稿では京都府下の椀形須恵器を集成し、型式や消長など基礎的な検討を行い、6世紀後半から7世紀にかけての須恵器生産の動向に迫りたい。

## 2. 椀形須恵器の分類

管見の限り、京都府下では108遺跡から約209点の椀形須恵器を確認している。椀形須恵器の形態は多様で、まずは形態的特徴から以下の通り型式分類を行い、資料の整理を試みる。椀形須恵器の各部名称は図2に示す。なお、7世紀以降、椀形須恵器は杯類との区別が困難なことも多い。恣意的との批判を承知の上で、本稿では分析の過程でいくつかの「典型的な」杯資料の口径と

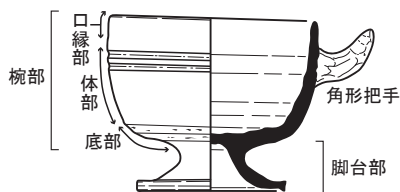


図2 椀形須恵器各部名称

径高指数(器高/口径×100)を計測し、口径12.0cm以下で径高指数が45より小さい資料は基本的には杯として捉え、椀との形態的境界とした。また椀形須恵器として報告された資料のほか、一部、鉢形須恵器や壺形須恵器として報告された資料も検討に含む。

①椀A類(図2)

径高指数50以下の比較的浅手の椀である。底部、体部、口縁部の形状が多様でさらに細分することも可能であるが、現状では細分類に有意性を見いだせていない。参考程度に1～5類の細分類を提示しておく。

**椀A1類** 丸底である。体部から口縁部にかけて直線的に上方へのびるもの、やや外側に広がりながら直線的にのびるもの、緩やかに内湾するものがあり、多様な形態を示す。器幅が14cmを超える大型の資料(19～24、数字は図3～8に同じ、以下同文)は、鉢形須恵器と捉えることもできる。また、角形把手がつく資料(7)も認められる。なお久田山B20号墳出土資料(16)は報告書では蓋として報告されているが、椀の可能性が高いと判断し、天地を反転した。

**椀A2類** 平底傾向である。体部から口縁部にかけて、わずかに内湾する資料と直線的に上方へのびる資料がある。湯船坂2号墳1・2区出土資料(25)は径高指数では杯の範疇に含まれるが、共伴遺物の杯と比較したときに明らかに異なるため椀と判断した。

**椀A3類** 体部から口縁部にかけてわずかに内湾させ、口縁部を外方へ緩やかに屈曲させる。器幅14cmを超える大型の資料(42)が確認できる。なお畑大塚古墳出土資料(41)は報告書では蓋として報告されているが、椀の可能性が高いと判断し、天地を反転した。

**椀A4類** 平底で、体部は内湾しながら外側へ広がる。口縁部は外側へ屈曲する。鉢形須恵器と捉えることもできる。

**椀A5類** 底部と体部の境界に沈線が施され、体部から口縁部にかけて緩やかに外反する。器幅が14cmを超える大型の資料(48)は、鉢形須恵器と捉えることもできる。

②椀B類(図4)

径高指数が50より大きく、62.5以下の比較的深手の椀である。蓋を伴う資料も認められる。古墳時代中期の杯蓋を逆転させたような、体部に突線状の段が巡る特徴的な資料(78・79)があり、これらは別類型として捉えうるかもしれない。

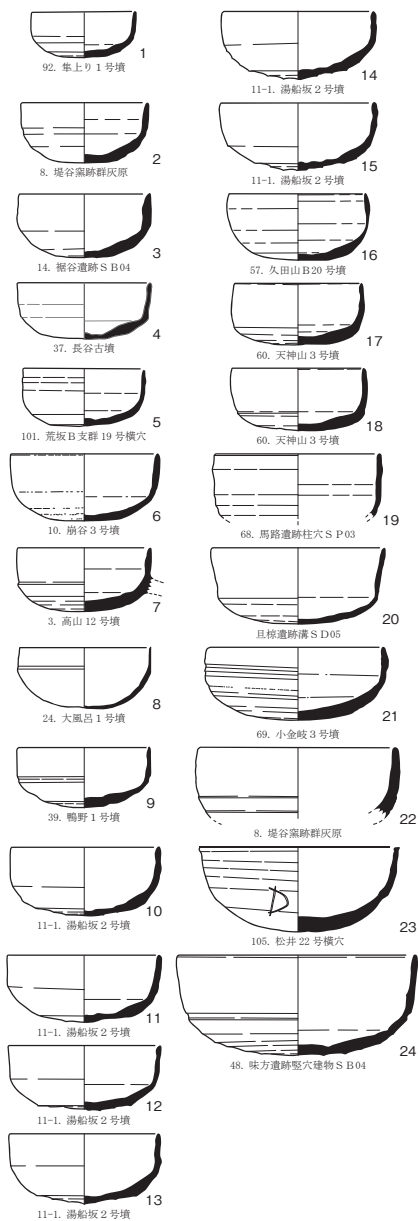
③椀C類(図4)

径高指数が62.5より大きい、「湯呑み形」の椀である。底部は平底傾向のものが多い。角形把手がつく資料が認められる。

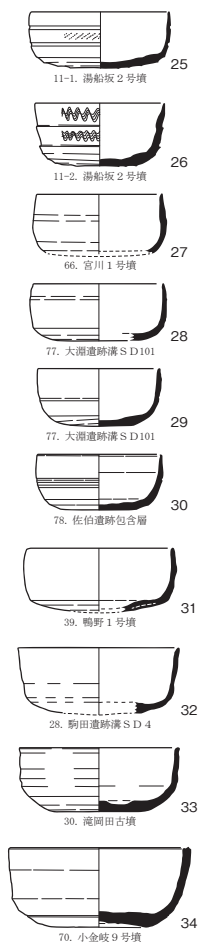
④椀D類(図5)

径高指数が50以下の比較的浅手の椀で、体部の中位に沈線や稜線が施される。体部中位から口縁部にかけては緩やかに外反しながらのびる。蓋を伴う資料も認められる。口径と径高指数が杯の範疇に含まれるものがあるが、通有の杯とは形態的に明らかに異なる一群と判断し、椀に分類した。

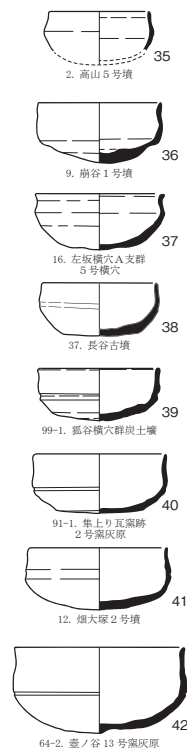
椀 A 1 類



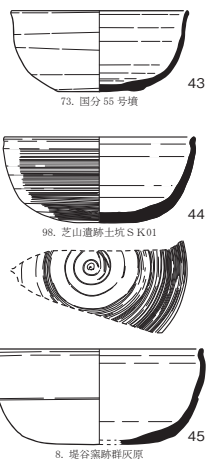
椀 A 2 類



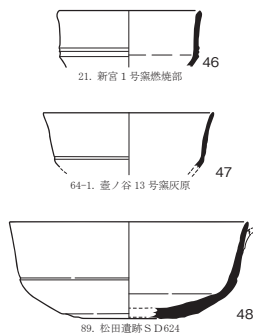
椀 A 3 類



椀 A 4 類



椀 A 5 類

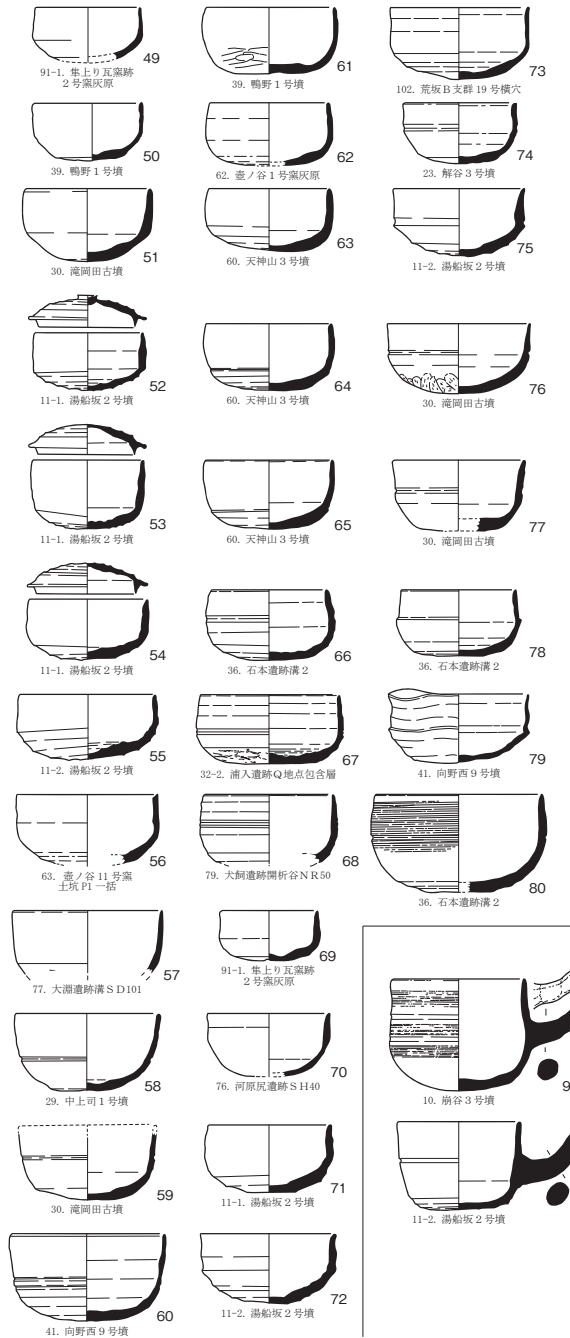


遺跡名の数字は表 1・図 9 に同じ

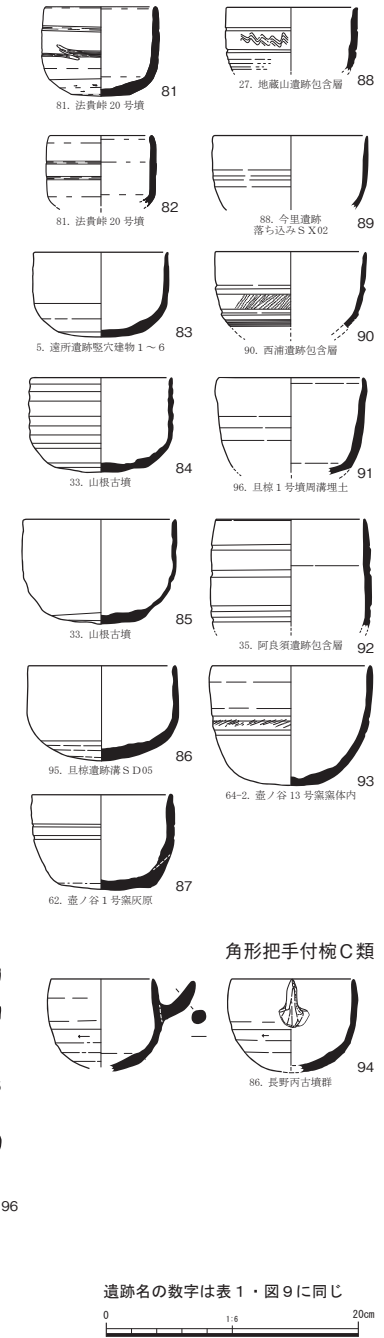


図 3 椀形須恵器(1) ※各報告書を再トレース

椀B類



椀C類



角形把手付椀C類

遺跡名の数字は表1・図9に同じ  
0 1.6 20cm

図4 椀形須恵器(2)※各報告書を再トレース

⑤椀E類(図5)

丸底傾向で体部下半に最大幅をもち、口縁部にかけて内傾する、「截頭卵形」の椀である。蓋を伴う資料や、半環状把手のつく資料もある。

⑥椀F類(図6)

平底傾向で体部下半に最大幅もち、口縁部にかけて内傾しながらわずかに外反する椀である。深手の資料(122~124)と浅手の資料(125・126)があり、蓋を伴う資料もある。口径と径高指数が杯の範疇に含まれるものがあるが、通常の杯とは異なる一群と判断し、椀に分類した。

⑦椀G類(図6)

体部から口縁部にかけて直線的に、外側に広がりながらあるいは、まっすぐ上方へのびる椀である。

⑧椀H類(図6)

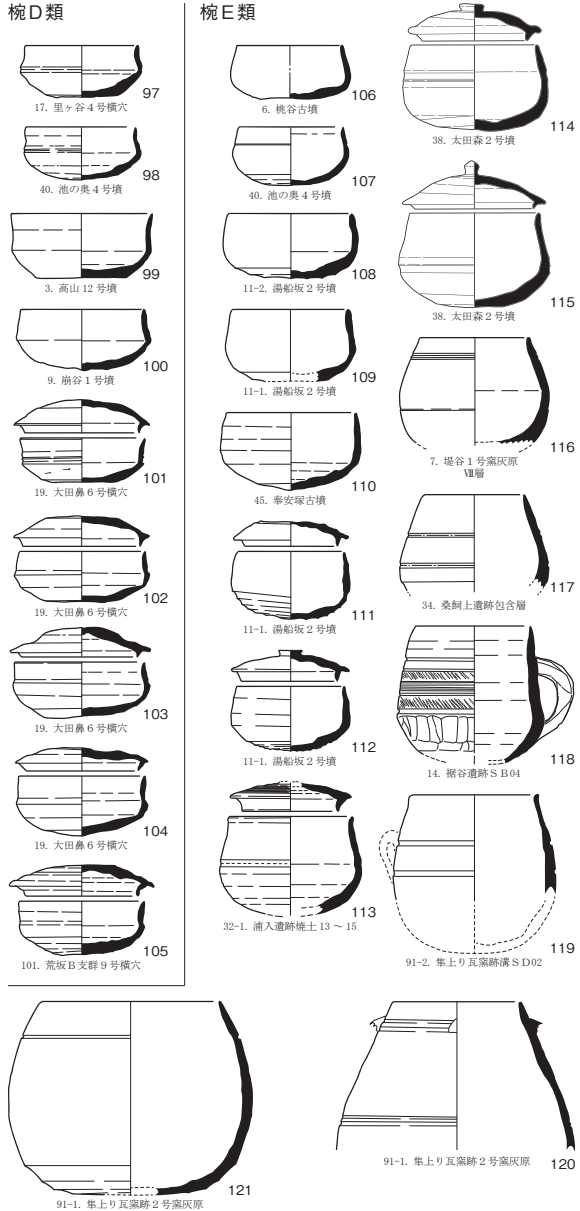
体部から口縁部にかけて大きく広がりながら内湾する、鉢形を呈する椀である。赤花古墳出土資料(137)は、椀の可能性が高いと判断し、天地を反転した。

⑨椀I類(図8)

体部下半で膨らみ、上半にかけてすばまりながら、口縁部は直線的に上方へのびる椀である。資料数が少ないが、類例が増える可能性を考え、設定しておく。

⑩椀X類(図6)

A~Iに属さない椀類である。

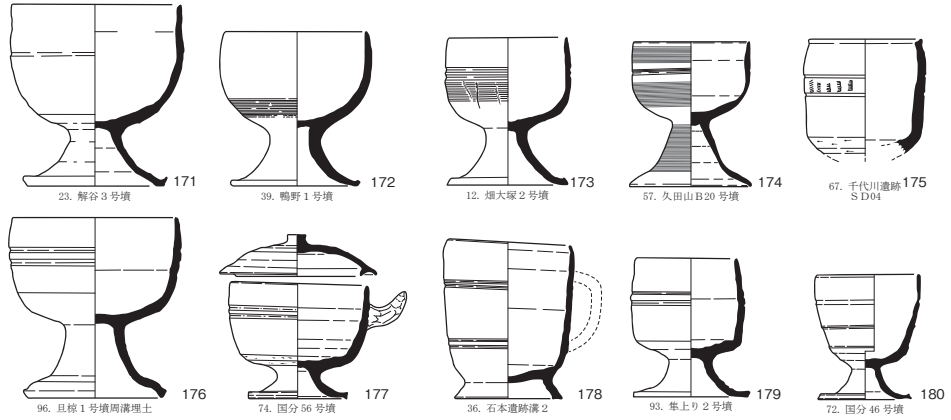


遺跡名の数字は表1・図9に同じ

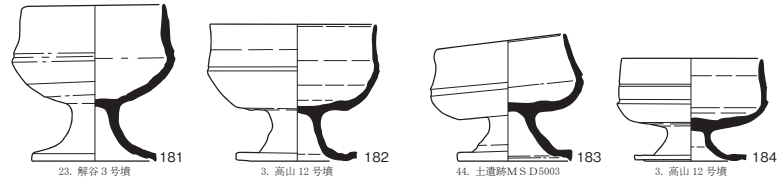
図5 椀形須恵器(3)※各報告書を再トレース



台付椀C類



台付椀D類



台付椀E類

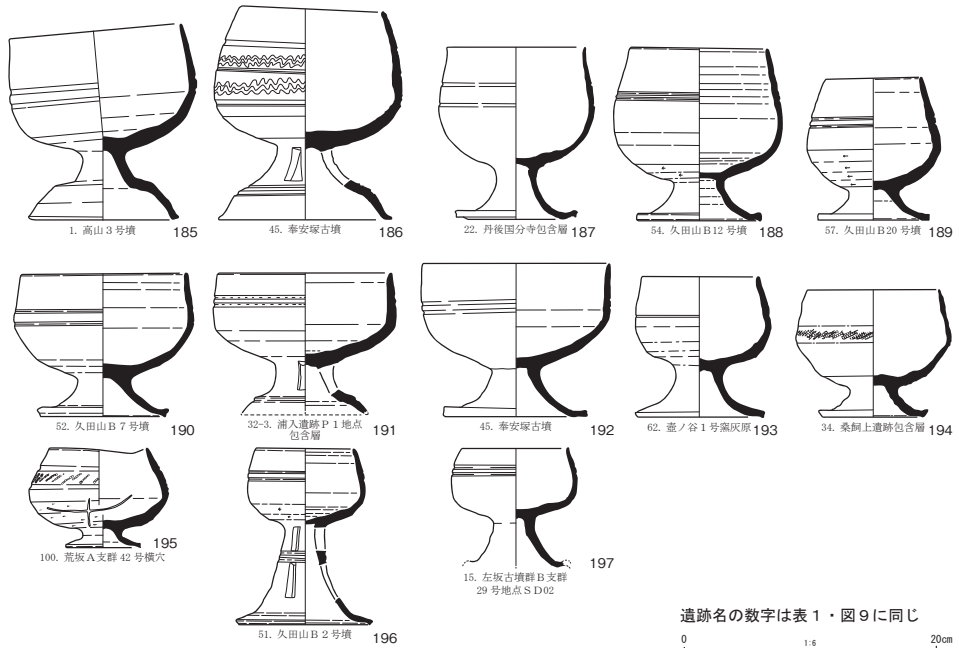
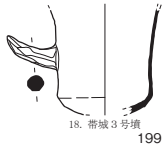
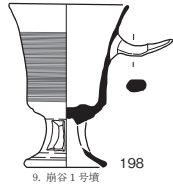
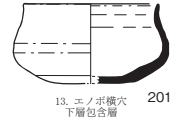
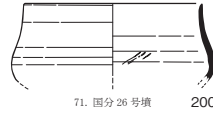


図7 椀形須恵器(5)※各報告書を再トレース

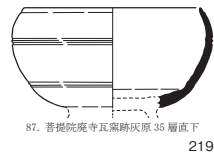
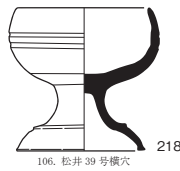
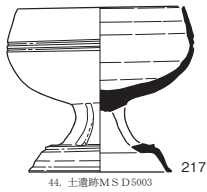
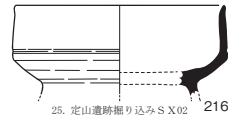
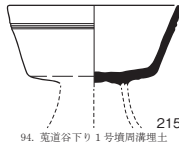
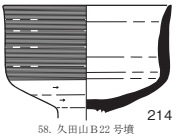
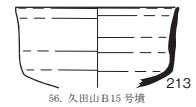
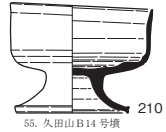
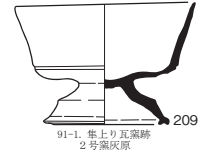
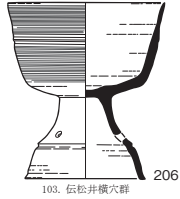
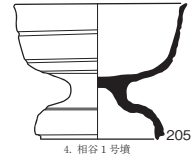
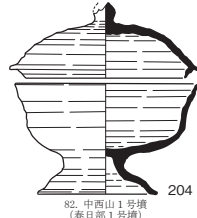
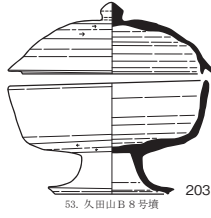
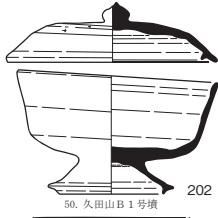
台付椀F類



椀I類

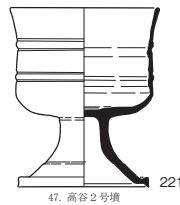
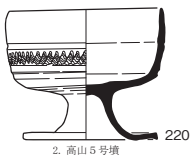


台付椀G類



台付椀H類

台付椀X類



遺跡名の数字は表1・図9に同じ

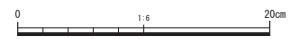


図8 椀形須恵器(6)※各報告書を再トレース

⑪台付椀A類(図6)

径高指数62.5以下の椀部をもつ台付椀である。丸底の資料と平底の資料があり蓋を伴う資料もある。天神山3号墳では椀と組み合わせる可能性が高い蓋(155~166)が出土している。

⑫台付椀B類(図6)

丸底で、内湾しながら外側へ広がる体部をもつ台付椀である。

⑬台付椀C類(図7)

径高指数が62.5より大きい、「湯呑み形」の椀部をもつ台付椀である。丸底の一群と平底の一群がある。角形把手がつく資料が認められる。

⑭台付椀D類(図7)

体部の中位に沈線や稜線が施され、口縁部にかけては緩やかに外反しながらのびる椀部に脚台がつく台付椀である。

⑮台付椀E類(図8)

丸底で体部下半に最大幅をもち、口縁部にかけて内傾する、「截頭卵形」の椀部に脚台がつく台付椀である。体部から口縁部にかけて、ほとんど内傾しない資料もあるが、底部の形態等から本分類に含めることが妥当と考え、型的に形骸化した資料としておく。

⑯台付椀F類(図8)

底部から体部にかけては円筒状に真っすぐ伸び、口縁部付近は外反する椀部をもつ。資料数が僅少であるが、椀類の中でも特異で、角形把手付台付椀の一類型と考えられる。

⑰台付椀G類(図8)

平底傾向の底部から口縁部にかけて直線的あるいは外反しながら開く椀部をもつ。開きが弱く底部から上方へ直線的にのびる口縁の資料もあるが、側面形態が逆台形を示すことから本分類に含めることが妥当と考え、型的にやや形骸化した資料として捉えておく。

⑱台付椀H類(図8)

体部から口縁部にかけて大きく広がりながら内湾する、鉢形を呈する椀部をもつ。

⑲台付椀X類(図8)

台付椀A~Hに属さない資料群である。

以上、椀形須恵器を9類、台付椀形須恵器を10類に分類した。このうち、椀C類と台付椀C類、椀D類と台付椀D類、椀E類と台付椀E類、椀Hと台付椀H類は、椀部形状が明確に類似しており、互いに対応する同一系統の類型と捉えられる。以降の分析では両者を一括して検討する。また角形把手をもつ資料は、台付椀F類を除いて、椀部の形状でいずれかに分類できるため、原型とした椀および台付椀に角形把手を付加させたものとみなし、椀部形状による分類に従って分析する。

### 3. 椀形須恵器の分布と時期

椀形須恵器について、類型ごとに分布を整理する。全体では、山城、丹波、丹後の各地域の主要な平野に普遍的に分布しているが、丹波地域に関しては現在の京丹波町に分布の空白地帯があり南北に分かれる(図9)。このうち、丹波北部と丹後に中心的に分布する類型として椀・台付椀D類、椀・台付椀E類、資料数が少ないが椀F類が挙げられる。注意しておきたいのは椀・台付椀D類、椀・台付椀E類はいずれも分布の中心である丹波北部と丹後のほかに飛び地のよ

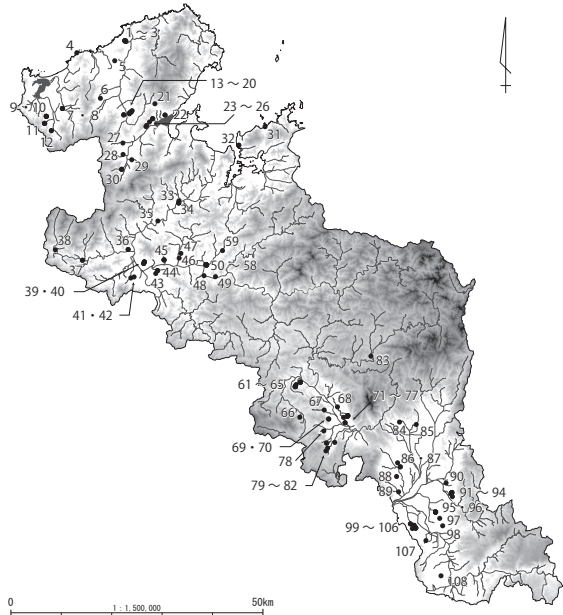


図9 椀形須恵器分布図

うに山城地域の南部に分布することである。両地域に直接の関連性があるとは考え難いが、これらのタイプの椀が分布する、共通の背景が存在する可能性がある。

出土遺構に関しては、古墳・横穴等の墳墓64地点、建物等集落が3地点、生産遺跡の窯跡が11地点、その他の性格不明遺構等が35地点であり、その半数以上が墳墓への副葬品として使用されたことがわかる。墳墓の規模については、玄室面積が10㎡を超える大型の石室墳もあるが、小規模な石室墳や横穴墓からも出土しており、有力墓に偏在することはない。後述する通り、椀形須恵器の多くは銅鍔を代表とする金属製容器の模倣と想定されることも多く、仏具等との関連も考えるが、現在のところ寺院や官衙などの仏教や地方行政に関わる遺跡からの出土はほとんどない。

椀形須恵器の各類型の消長を検討する。基準とする編年は、京都府下の各地域の編年を用いることが望ましいが、現状では編年が確立しているとは言い難い。地域特有の器種組成や型式変化を反映していないという問題はあるが、統一的な基準で分析を行うため、古墳時代については『須恵器大成』<sup>(注2)</sup>における編年を、飛鳥時代については『飛鳥時代の土器編年再考』<sup>(注3)</sup>で提示された編年を用いて検討したい。

椀形須恵器の出土遺構は多岐にわたる。墳墓は追葬があること、窯跡は一定の操業期間が見込まれること、集落やその他の遺構は一括資料に乏しいことなど、椀形須恵器の所属時期を明確にすることが難しい状況にある。そこで、以下の方法で分析を行った。

表1 椀形須恵器一覧

	所在地	遺跡名	出土地点	種類	時期	出土類型	文献
1	京丹後市	高山3号墳	玄室か羨道	古墳	飛鳥I古～II	台E	七概29
2	京丹後市	高山5号墳	玄室	古墳	TK209～飛鳥I古	椀A3・台X	
3	京丹後市	高山12号墳	石室内	古墳	TK209～飛鳥I中	角椀A1・椀D・台D	
4	京丹後市	相谷1号墳	玄室	古墳	飛鳥I古～新	台G	
5	京丹後市	遠所遺跡	竪穴建物1～6	集落	TK43～TK209、飛鳥III～IV	椀C	七報21
6	京丹後市	桃谷古墳	石室内	古墳	TK43～飛鳥I中	椀E	府報22
7	京丹後市	堤谷1号窯	灰原VII層	窯跡	飛鳥I古	椀E	府教委1993
8	京丹後市	堤谷窯跡群	灰原	窯跡	飛鳥I古～V	椀A1・椀A4・椀G	
9	京丹後市	崩谷1号墳	羨道	古墳	MT85～飛鳥I中	椀A3・椀D	府教委1988
10	京丹後市	崩谷3号墳	石室内	古墳	MT85～飛鳥I中	椀A1・角椀C・台F	府教委1989
11-1	京丹後市	湯船坂2号墳	1・2区	古墳	TK43～TK209	椀A1・椀A2・椀B・椀E	久美浜町7
11-2	京丹後市	湯船坂2号墳	9～21区	古墳	TK209～飛鳥III	椀A2・椀B・角椀C・椀E	
12	京丹後市	畑大塚2号墳	玄室	古墳	MT85～TK209	椀A3・台C	久美浜町10
13	京丹後市	エノボ横穴	下層包含層	その他	飛鳥I中～II	椀I	府教委1995
14	京丹後市	裾谷遺跡	S B 04	集落	TK209～飛鳥I新	椀A1・椀E	七概65
15	京丹後市	左坂古墳群B支群29号地点	溝状遺構SD02	その他	TK43～飛鳥I中	台E	府教委1991
16	京丹後市	左坂横穴A支群5号横穴		横穴墓	飛鳥III～平城I	椀A3・椀F	府教委1993
17	京丹後市	里ヶ谷4号横穴	前庭部	横穴墓	TK209～飛鳥I古	椀D	七概55
18	京丹後市	帯城3号墳	木棺土壙	古墳	MT15	台椀F	府教委1985
19	京丹後市	大田鼻6号横穴	玄室か	横穴墓	TK209～飛鳥I中	椀D・椀F	府教委1987
20	京丹後市	有明5号横穴	前庭部	横穴墓	飛鳥III～飛鳥IV	台B	大宮町14
21	京丹後市	新宮1号窯	燃焼部	窯跡	飛鳥I古～飛鳥V	椀A5	府教委1974
22	宮津市	丹後国分寺跡	下層包含層	その他	—	椀F	宮津市22
23	与謝野町	解谷3号墳	石室内	古墳	TK43～飛鳥I新	椀B・台C・台D	岩滝町12
24	与謝野町	大風呂1号墳	墳丘内	古墳	—	椀A1	注5
25	与謝野町	定山遺跡	掘り込みS X 02	その他	TK43～飛鳥I中	台G	七概54
26	与謝野町	赤花古墳	不明	古墳	TK209～飛鳥I新	椀H	岩滝町4
27	与謝野町	地藏山遺跡	包含層	その他	—	椀C	注6
28	与謝野町	駒田遺跡	溝S D 4	その他	飛鳥III～V	椀A2	加悦町27
29	与謝野町	中上司1号墳	石室内	古墳	TK209～飛鳥I新	椀B	加悦町5
30	与謝野町	滝岡古墳	石室内	古墳	TK209～飛鳥I中	椀A2・椀B・椀X	加悦町22
31	舞鶴市	三浜丸山1号墳	玄室	古墳	TK209～飛鳥I中	椀F	舞鶴市38
32-1	舞鶴市	浦入遺跡	焼土13～15	その他	TK209～飛鳥I中	椀E	舞鶴市36
32-2	舞鶴市	浦入遺跡	Q地点包含層	その他	—	椀B	
32-3	舞鶴市	浦入遺跡	P1地点包含層	その他	—	台椀E	
33	舞鶴市	山根古墳		古墳	TK43～飛鳥I古	椀C	七概62
34	舞鶴市	桑銅上遺跡	包含層	その他	飛鳥I古～新	椀E・台E	七報19
35	福知山市	阿良須遺跡	包含層	その他	—	椀C	七集177
36	福知山市	石本遺跡	溝2	その他	TK10～飛鳥I新	椀B・台C	七報8
37	福知山市	長谷古墳	不明	古墳	飛鳥I古～新	椀A1・椀A3	注7
38	福知山市	太田森2号墳	玄室	古墳	飛鳥I新	椀E	注8
39	福知山市	鴨野1号墳	石室内か	古墳	TK10～飛鳥I新	椀A1・椀A2・椀B・台C	福知山市41
40	福知山市	池の奥4号墳	玄室か	古墳	MT85～飛鳥II	椀D・椀E	福知山市7
41	福知山市	向野西9号墳	玄室	古墳	TK209～飛鳥IV	椀B	福知山市4
42	福知山市	広峯遺跡	包含層	その他	—	椀G	福知山市16
43	福知山市	中坂8号墳	石室内か	古墳	飛鳥I中	台B	府教委1972・注9
44	福知山市	土遺跡	溝MS D 5003	その他	飛鳥I古～中	台D・台H	福知山市56
45	福知山市	奉安塚古墳		古墳	TK209～飛鳥I古	椀E・台E	福知山市25
46	綾部市	三宅遺跡	溝S D 16	その他	—	椀F	七報18
47	綾部市	高谷2号墳		古墳	TK43～飛鳥I古	台X	綾部市1
48	綾部市	味方遺跡	竪穴建物S B 04	集落	TK43～飛鳥I中	椀A1	七概18
49	綾部市	ゆきおれ窯跡	表採	窯跡	飛鳥I古～中	椀G	綾部市23
50	綾部市	久田山B1号墳	玄室	古墳	TK43～飛鳥I新	台G	綾部市45
51	綾部市	久田山B2号墳		古墳	MT85～TK209	台E	
52	綾部市	久田山B7号墳	石室内か	古墳	TK209～飛鳥I新	台E	
53	綾部市	久田山B8号墳	玄室	古墳	TK43～飛鳥III	台G	
54	綾部市	久田山B12号墳	石室内か	古墳	TK209～飛鳥II	台E	

京都府埋蔵文化財論集 第9集

	所在地	遺跡名	出土地点	種類	時期	出土類型	文献
55	綾部市	久田山B 14号墳	不明	古墳	TK43～飛鳥I新	台G	綾部市 45
56	綾部市	久田山B 15号墳	玄室	古墳	飛鳥I中～新	台G	
57	綾部市	久田山B 20号墳		古墳	TK43～飛鳥I中	腕A1・台C・台E	
58	綾部市	久田山B 22号墳	羨道	古墳	TK209～飛鳥I新	台G	
59	綾部市	南稲葉遺跡	R地区包含層	その他	—	台G	七概94
60	南丹市	天神山3号墳	玄室	古墳	飛鳥I古～中	腕A1・腕B・台A	園部町 10
61	南丹市	天神山4号墳	石室内	古墳	TK43～飛鳥I新	台A	
62	南丹市	壺ノ谷1号窯	灰原	窯跡	TK43～飛鳥I中	腕B・腕C・腕H・台E	注 10
63	南丹市	壺ノ谷11号窯	土坑P1一括	その他	TK209	腕B	
64-1	南丹市	壺ノ谷13号窯	灰原	窯跡	TK209～飛鳥I中	腕A3・腕A5	
64-2	南丹市	壺ノ谷13号窯	窯体内	窯跡	飛鳥I古～中	腕C	
65	南丹市	壺ノ谷14号窯	最終床面	窯跡	飛鳥II・III	台A	
66	亀岡市	宮川1号墳	石室内	古墳	TK209～飛鳥I中	腕A2	府教委 1996
67	亀岡市	千代川遺跡	溝SD 04	その他	飛鳥I新	台C	七概44
68	亀岡市	馬路遺跡	柱穴SP 03	その他	—	腕A1	七概123
69	亀岡市	小金岐3号墳	玄室	古墳	TK43～TK209	腕A1	七概17
70	亀岡市	小金岐9号墳	石室内	古墳	飛鳥I新～III	腕A2	府教委 1977
71	亀岡市	国分26号墳	周溝	古墳	飛鳥I古～新	腕I	七集129
72	亀岡市	国分46号墳	玄室	古墳	飛鳥I古～中	台C	七集129
73	亀岡市	国分55号墳	石室内	古墳	飛鳥I中～II	腕A5	七集134
74	亀岡市	国分56号墳		古墳	TK209～飛鳥I中	角台C	七集134
75	亀岡市	国分61号墳	玄室	古墳	飛鳥I古～中	台A	七集147
76	亀岡市	河原尻遺跡	竪穴建物SH40	その他	飛鳥I新～II	腕B	七概114
77	亀岡市	大淵遺跡	溝SD101	その他	MT15～飛鳥I古	腕A2・腕B	七概111
78	亀岡市	佐伯遺跡	B-2トレンチ 包含層	その他	—	腕A2	七集178
79	亀岡市	大飼遺跡	開析谷NR 50 I・II層	その他	TK43～飛鳥V	腕B・台腕B	七集185
80	亀岡市	南条4号墳	石室外	古墳	飛鳥II	腕G	注11
81	亀岡市	法貴峠20号墳		古墳	TK43～飛鳥I古	腕C	七集197
82	亀岡市	中西山1号墳(春日部1号墳)	石室内か	不明	TK209～飛鳥I新	台G	亀岡市 19
83	京都市	周山瓦窯跡3号窯	第5次操業	窯跡	平城I	腕G	注12
84	京都市	御堂ヶ池11号墳(大宝寺2号墳)	玄室	古墳	TK209～飛鳥I古	腕X	注13
85	京都市	北野庵寺	溝SD38下層	その他	飛鳥I新～II	腕G	市埋研 7
86	向日市	長野丙古墳群	不明	その他	TK43-209	角腕C	注14
87	向日市	菩提院庵寺瓦窯跡	灰原35層直下	窯跡	飛鳥III・IV	腕G・台H	向日市 48
88	長岡京市	今里遺跡	落ち込みSX02	その他	TK209～飛鳥I古	腕C	長埋セ 47
89	大山崎町	松田遺跡	溝SD624	その他	TK209～飛鳥V	腕A5	大山崎町 41
90	宇治市	西浦遺跡	包含層	その他	—	腕C	宇治市 35
90-1	宇治市	牟上り瓦窯跡	2号窯灰原	窯跡	飛鳥I古～中	腕A3・腕B・腕E・腕H・台G	宇治市 3
90-2	宇治市	牟上り瓦窯跡	溝SD02	その他	飛鳥I新	腕E	宇治市 3
92	宇治市	牟上り1号墳		古墳	TK209～飛鳥I中	腕A1	七報7・七概20
93	宇治市	牟上り2号墳		古墳	TK43～飛鳥I新	台C	七報7
94	宇治市	菟道谷下り1号墳	周溝埋土	古墳	飛鳥I古～III	台G	宇治市 5
95	宇治市	旦椋遺跡	溝SD05	その他	TK209～飛鳥I新	腕A1・腕C	宇治市 25
96	宇治市	旦椋1号墳	周溝埋土	古墳	—	腕C・腕G・台C・台G	宇治市 28
97	城陽市	正道遺跡	掘立柱建物SB8301	その他	飛鳥III～IV	腕G	城陽市 13
98	城陽市	芝山遺跡	O地区土坑SK 01	その他	飛鳥III～IV	腕A5	七集189
99-1	八幡市	狐谷横穴群	炭土壙	その他	飛鳥I新	腕A3	七概5・8
99-2	八幡市	狐谷8号横穴	横穴墓	横穴墓	飛鳥I中・飛鳥IV	台G	
100	八幡市	荒坂A支群42号横穴	羨道	横穴墓	飛鳥I古～新	台E	七集157
101	八幡市	荒坂B支群9号横穴	玄室	横穴墓	飛鳥I新～III	腕D・台A	七報34
102	八幡市	荒坂B支群19号横穴		横穴墓	飛鳥I新	腕A1・腕B	七報34
103	京田辺市	伝松井横穴群	横穴墓	横穴墓	—	台G	田辺町 3
104	京田辺市	松井20号横穴		横穴墓	TK209	台B	七集171

	所在地	遺跡名	出土地点	種類	時期	出土類型	文献
105	京田辺市	松井 22 号横穴	玄室	横穴墓	飛鳥 I 古～II	椀 A1	七集 171
106	京田辺市	松井 39 号横穴	玄室	横穴墓	飛鳥 I 新	台 H	七集 171
107	精華町	森垣外遺跡	流路 14	その他	—	椀 X	七概 91
108	京田辺市	堀切 4 号墳	溝	その他	MT85 か	椀 X	田辺町 11

※1 番号は第9図に同じ

※2 文献凡例：「七報」→「京都府遺跡調査報告書」+巻次「七概」→「京都府遺跡調査概報」+巻次「七集」→「京都府遺跡調査報告集」+巻次「府報」→「京都府史蹟名勝天然記念物調査報告」+巻次「府教委」→「埋蔵文化財調査概報」・「京都府埋蔵文化財調査報告書」（京都府教育委員会発行）+発行年「長埋セ」→長岡京市埋蔵文化財調査報告書+巻次「市埋研」→京都市埋蔵文化財研究所調査報告「〇〇市（町）」→当該市町村発行の「文化財調査報告」+巻次

まず類型ごとに出土した遺跡を抽出し、共伴遺物等から時期が推定できる遺構について個体数を計数する。遺構ごとの椀形須恵器の最大存続期間を明らかにし、個体数を最大存続期間で等分することで、各時期の個体数を仮定する。各時期の個体数を合計し、当該類型全体の個体数との比率を算出することで、時期ごとの存在率を明らかにし、椀形須恵器の出現とピーク、消滅を視覚的に示す。

椀A1類を具体例として挙げてみたい。表2に示すように、椀A1類が出土した遺跡のうち、時期が推定できる15遺跡から22個体が出土している。隼上がり1号墳では、出土遺物はTK209から飛鳥I中相までの3時期にわたり、椀A1類は1個体出土している。この場合、個体数1に対して3時期(TK209・飛鳥I古相・飛鳥I中相)の存続期間があるため、個体数1を存続期間3で等分し、各時期の個体数を0.33個体と仮定する。他の遺跡も同様に各時期の個体数を算出し、時期ごとに個体数を合計すると、MT85段階は0.2個体、TK43段階は4.23個体、TK209段階は5.64個体、飛鳥I古相は4.23個体、飛鳥I中相は3.89個体、飛鳥I新相は2.53個体、飛鳥IIは0.5個体、飛鳥III～飛鳥V・平城Iは各0.25個体となる。これを椀A1の総数22に対する割合で示すと、MT85段階は1%、TK43段階は19%、TK209段階は26%、飛鳥I古相は19%、飛鳥I中相は18%、飛鳥I新相は12%、飛鳥IIは2%、飛鳥III～飛鳥V・平城Iは1%である。以上の分析を各類型に対して行いこの割合を視覚的に示したものが図10である。共伴土器の時期幅に対し出土数が少ない場合、各時期の存在率が低くなり、本来存在しない時期にも存在率が表れてしまうという問題があるため、存在率が0～10%の段階は実態と乖離する可能性があるが、10%を超えた段階はある程度実態を示すと推測される。なお時期が推定できる遺構からの出土数が僅少である台付椀I類、類例のない椀・台付椀X類については分析から除外した。

椀形須恵器の消長について概観すると、椀A1類、A2類、椀B類、椀・台付椀C類、椀・台付椀E類がTK43段階に現れると考えられ、椀A3類、椀A5類、台付椀B類、椀・台付椀D類、台付椀G類がTK209段階には現れる。これらの類型は実年代にして6世紀後半でも遅い段階から7世紀初頭までの古墳時代に出現した椀といえる。これに対し、飛鳥

表2 椀A1類の時期別個体数

	MT85	TK43	TK209	飛鳥I 古	飛鳥I 中	飛鳥I 新	飛鳥II	飛鳥III	飛鳥IV	飛鳥V 平城I	点数
隼上り1号墳			0.33	0.33	0.33						1
荒坂B支群19号横穴						1					1
堤谷窯跡群灰原			0.25	0.25	0.25	0.25	0.25	0.25	0.25	0.25	2
長谷古墳				0.33	0.33	0.33					1
鴨野1号墳		0.2	0.2	0.2	0.2	0.2					1
裾谷遺跡SB04			0.25	0.25	0.25	0.25					1
崩谷3号墳	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2						1
天神山3号墳				1	1						2
久田山B20号墳		0.25	0.25	0.25	0.25						1
湯船坂2号墳(1・2区)		3	3								6
小金岐3号墳		0.33	0.33	0.33							1
松井22号横穴				0.25	0.25	0.25	0.25				1
味方遺跡		0.25	0.25	0.25	0.25						1
高山12号墳			0.33	0.33	0.33						1
旦那遺跡溝SD05			0.25	0.25	0.25	0.25					1
期間別個体数	0.2	4.23	5.64	4.23	3.89	2.53	0.5	0.25	0.25	0.25	22
期間別存在率	1%	19%	26%	19%	18%	12%	2%	1%	1%	1%	100%

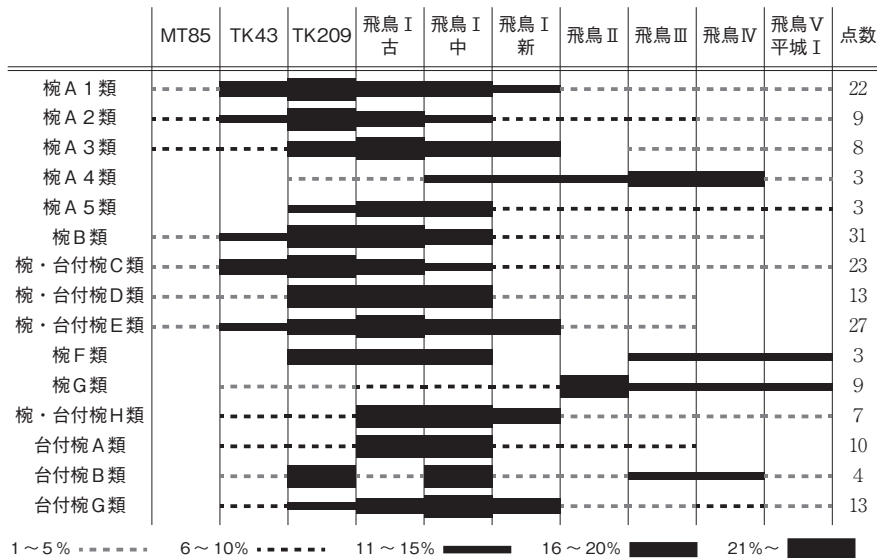


図10 椀形須恵器の消長

I古相から出現する台付椀A類、椀・台付椀H類、飛鳥I中相から出現する椀A4類、飛鳥IIから出現する椀Gは7世紀以降の飛鳥時代に出現した椀と捉えられる。特に椀G類は飛鳥V・平城Iまで一定数存在し続け、奈良時代以降も椀の形式として存続することから、飛鳥I以降に登場し、以降、一般的な椀として定着したことを示すものである。一方、椀G類以外の類型はそのほとんどが飛鳥I新相までしか存続せずに姿を消す。ただし、資料数が少ないため実態を示していない可能性はあるものの、椀A類の一部(椀A4類、椀A5類)や台付椀B類は飛鳥II以降も存続しており、全体としては姿を消してゆく傾向の中で、7世紀中葉以降も椀として存続する類型も少数存在するようである。

#### 4. 椀形須恵器の祖形と動向

最後に京都府下から出土した椀形須恵器の特徴について検討を試みる。出土した椀形須恵器については、椀形須恵器9類型、台付椀形須恵器10類型と多様であり、そのすべてを同じ系譜で捉えることはできないであろう。研究史を参照すると、金属製容器の模倣<sup>(注15)</sup>、陶質土器の模倣<sup>(注16)</sup>、模倣土器の模倣<sup>(注17)</sup>などの可能性が挙げられており、さらに陶質土器についてもどの地域の模倣とするか諸説がある。ただ、「金属製容器の模倣土器をさらに模倣したような、間接的な金属製容器模倣土器を含めて、金属製容器を本来の祖形とする類型」と「陶質土器を祖形とする類型」と「祖形が不明の類型」の三類型に概括的に大別することは可能であろう。そこで、金属製容器と陶質土器との比較を行いたい。金属製容器については、銅鏡の型式と系譜、さらに模倣土器の性格について整理した吉岡康暢氏の論考<sup>(注18)</sup>を参照した。陶質土器については韓半島の椀形陶質土器について検討した小池寛氏の論考<sup>(注19)</sup>や藤川智之氏の論考<sup>(注20)</sup>を参照した。

椀A類は径高指数で比較すると、吉岡分類鏡C・D類の範疇に含まれる。金属製容器に特徴的な複線文を模倣した沈線が巡る資料も認められ、椀A類は基本的に金属製容器の模倣土器と捉えてよいと考える。なお、椀A4類のように若干外側へ屈曲させる口縁部の形状は吉岡分類鏡C・D類の銅鏡でも確認できるようであり、祖形になった可能性がある。ただ、銅鏡は稜鏡(吉岡分類鏡I類)を除き、基本的に口縁部が緩やかに外反する資料がないため、A3類やA5類は金属製容器の間接模倣にあたる可能性が高い。椀B類は径高指数で比較すると、吉岡分類鏡A類の範疇に含まれる。吉岡分類鏡A類は基本的に鈕のある蓋を伴う。椀B類は無鈕の蓋もあるが有蓋椀も認められ、A類と同様、基本的に金属製容器の模倣土器と捉えてよいと考える。椀・台付椀C類は、陶質土器の資料に形態的に類似する資料がなく、金属製容器と比較しても傾向指数が一致する資料は確認できない。ただし、吉岡分類鏡A類は傾向指数が近似し、形態的にも類似すること、体部に複線文が巡る資料もあることから、さしあたり金属製容器の模倣土器と位置付けておく。椀・台付椀E類は「截頭卵形」の椀部形状や半環状の把手をもつ資料から、小池分類陶質土器椀B2類、藤川分類II2類を祖形にするとみられる。椀G類は奈良文化財研究所の器種分類における椀Aにあたる。金属製容器を模倣した椀形須恵器の型式変化の末、定型化した器種であると考えられるならば、ある種の金属製容器の模倣と捉えられる。椀・台付椀H類は鉢形を呈するもので、明確に祖形とみなせる金属製容器や陶質土器は確認できない。ただ、「盂」のような銅鉢を模倣した可能性が高く、金属製容器模倣の類型と捉えられる。台付椀A類は、明確に祖形とみなせる金属製容器や陶質土器は確認できないが、椀部に巡る複線文や、蓋

を伴う資料の存在から金属製容器の模倣の可能性が高い。椀部の径高指数を銅鏡と比較した場合、吉岡分類鏡C・D類の範疇に含まれるが、吉岡分類鏡C・D類には脚台がつかないため、直接的な祖形は存在しない。金属製容器の間接模倣に加えて脚台も付加し、ほとんど本来の金属製容器の要素を残していない。台付椀B類は、明確に祖形とみなせる金属製容器や陶質土器は確認できない。椀部の径高指数は概ね50以上となり、金属製容器の模倣とした椀B類に脚台が付随するとも考えられ、金属製容器の間接模倣の結果、本来の金属製容器から変容した形態となった台付椀と捉えておく。台付椀F類は、明確に祖形とみなせる金属製容器や陶質土器は確認できない。ただし、京都府下以外でも類例があり、角形把手付台付椀の一型式として定型化した渡来系遺物と推定される。台付椀G類は腕部の径高指数で比較すると、吉岡分類鏡A類の範疇に含まれる。特に吉岡分類鏡AⅡ類は台脚有蓋杯とされ、鈕のある蓋を伴うもので、台付椀G類の祖形になったと考えられる。ただし金属製容器は基本的に椀部の体部は内湾しており、台付椀G類のように側面形が逆台形を呈さないことから、金属製容器の間接模倣と考えられる。この他、椀・台付椀D類、椀F類、椀I類については、金属製容器、陶質土器ともに祖形とすることが難しく、現状では系譜が不明である。

以上、椀形須恵器の各類型の祖形について検討を試みた。まとめると以下の通りである。

- ①金属製容器を祖形とする類型：椀A類/椀B類/椀・台付椀C類/椀G類/椀・台付椀H類/台付椀A類/台付椀B類/台付椀G類
- ②陶質土器を祖形とする類型：椀・台付椀E類/台付椀F類
- ③祖形が不明の類型：椀・台付椀D類、椀F類、椀I類

最後に、ここまでの検討を踏まえて、改めて椀形須恵器の消長とその背景についてまとめたい。陶質土器を祖形とする椀形須恵器と金属製容器を祖形とする椀形須恵器のいずれもがTK43段階には出現するが、前者はその後、種類が増えないのに対し、後者はTK209段階、飛鳥Ⅰ中相にかけて段階的に種類が増加する。TK43段階に椀形須恵器が登場し始める背景については判然としないが、伽耶諸国の滅亡に伴う亡命渡来人や、あるいは飛鳥寺の建立に見られるような百済との外交の影響で、倭国内で陶質土器や仏具等の金属製容器の模倣が盛んに行われるようになったのかもしれない。興味深いのは、京都府下で出土した各類型の椀形須恵器のほとんどが飛鳥Ⅰ真相で姿を消すことである。そのなかで金属製容器を模倣した椀形須恵器の一部の類型(椀A4類、椀A5類、台付椀B類、椀G類)だけが飛鳥Ⅱ以降も椀形須恵器として選択的に製作されることになるのである。つまり、7世紀中葉を境に、陶質土器を祖形とする椀形須恵器や、祖形が不明の椀形須恵器は生産を停止し、金属製容器を模倣した椀形須恵器も奈良文化財研究所の器種分類における杯G

や杯Aに収斂していくように、椀形須恵器の種類が整理されるのである。金属製容器の模倣土器が7世紀中葉に姿を消す背景については、推古朝前後の政権が階層的な食器制定立プランに基づいた施策として意図的に制御したとする説も提唱<sup>(注23)</sup>されている。また、7世紀の土器様式が飛鳥Ⅲ以降に変化し、大型供膳具や土師器高杯Bが土器組成のなかで上位器種として扱われたことも指摘<sup>(注24)</sup>されている。椀形須恵器の器種の減少とは時期が一致しない部分もあるが、土器様式の変化の中で、多様な形態をもつ椀形須恵器や高い脚台を持つ台付椀が、上位器種や政治的に統制された食器制と競合することを避けるために規制されたのかもしれない。そうであれば、そうした政策が山城地域から丹後地域まで浸透していたことを示すのであろう。

## 5. おわりに

本稿では、京都府下から出土した椀形須恵器を集成し、分類と存続時期について整理した。さらに分類した各類型について金属製容器の模倣、陶質土器の模倣、祖形不明の3種類に大別できることを示し、それぞれの類型について消長を比較したところ、7世紀中葉において椀形須恵器の生産に大きな変化があることが明らかになった。これは、乙巳の変を端緒として7世紀後半にかけて起きた政変に関連して、食器制の変革がおきたとする先行研究を支持する事例研究となった。

椀形須恵器と金属製容器の比較について、本稿では径高指数によって行った。しかし、吉岡氏の銅鏡分類と椀形須恵器の分類が厳密に一致するわけではない。今回、対象資料を実見できておらず、台付椀については椀部形状のみで形態分類を行ったため、脚台部の形状を分類に反映しておらず、さらなる検討も求められる。そのほか、関東地方や九州地方での金属製容器模倣土器の先行研究についても十分に参照できず、検討に反映することができなかった。今後の課題としたい。全体として竜頭蛇尾な結果に終わったが、京都府下における7世紀代の須恵器生産の動向を示す事例研究として、今後の研究に資することがあれば幸いである。

(なむら・たけひこ＝当調査研究センター調査課主任)

注1 小池 寛2016「飛鳥時代における朝鮮半島系土器土器の生産とその背景」『京都府埋蔵文化財論集』第7集—創立35周年記念誌— 京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.79-86

注2 田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

注3 大澤正吾2019「飛鳥時代における土師器杯C・杯Aの変遷とその区分」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会 pp.54-74、森川 実2019「飛鳥時代における須恵器食器の分量変化」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会 pp.34-53

- 注4 釋 龍雄1962 『相谷古墳発掘調査報告』京都府立網野高等学校郷土史研究部
- 注5 江上 寛1977 『岩滝町、大風呂古墳発掘調査報告書』岩滝町教育委員会
- 注6 白敷真也2018 『平成29年国庫補助事業発掘調査報告書』梅谷遺跡発掘調査(第2次)地蔵山遺跡発掘調査(第8次) 与謝野町教育委員会
- 注7 諫早直人・溝口泰久・守田悠2024「6. 長谷古墳」『夜久野の後期古墳と末窯跡群』京都府立大学文学部歴史学科 pp.81-84
- 注8 池田野々花・諫早直人・小林楓・溝口泰久・守田悠・横白彩江2024「5. 太田森2号墳」『夜久野の後期古墳と末窯跡群』京都府立大学文学部歴史学科 pp.61-80
- 注9 黒田恭正・杉本 宏1983「中坂古墳群・他」『丹波の古墳』I 一由良川流域の古墳一 山城考古学研究会 pp.109-118
- 注10 二ノ宮早緒理・浜中有紀編2000『壺ノ谷窯址群・桑ノ内遺跡発掘調査報告書』佛教大学
- 注11 三上貞二1974「亀岡市南条4号墳発掘調査報告—京都学園大学構内—」『京都学園大学論集』第3巻第2号 京都学園大学学会 pp.79-97
- 注12 宇野隆夫編1982『丹波周山窯址』京都大学文学部考古学研究室
- 注13 石部正志ほか1971「第11号墳」『嵯峨野の古墳時代 御堂ヶ池群集墳発掘調査報告』京都大学考古学研究会 pp.81-87
- 注14 秋山浩三1989「『物集女ノ群集墳』の再評価」『京都考古』第52号 京都考古刊行会 pp.1-13
- 注15 西 弘海1982「土器様式の成立とその背景」小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会編『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社 pp.447-471
- 注16 藤川智之1993「古墳時代須恵器椀・台付椀の検討」『真朱』第2号 徳島県埋蔵文化財センター研究紀要 徳島県埋蔵文化財センター pp.117-134
- 注17 桃崎祐輔2006「金属器模倣須恵器の出現とその意義」『筑波大学 先史学・考古学研究』第17号 筑波大学人文社会科学部研究科 先史学・考古学コース pp.81-102
- 注18 吉岡康暢2024「銅鏡の型式、系譜と模倣土器をめぐる問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第248集 国立歴史民俗博物館 pp.1-36
- 注19 小池 寛1995「陶質土器・盃に関する基礎研究」金関 恕・置田雅昭編『古墳文化とその伝統』勉誠社 pp.451-474
- 注20 前掲注16に同じ
- 注21 横山 聖2018「鳥取県内から出土する角形把手付椀の分布とその意味」『半田山地理考古』第6号 岡山理科大学生物地球学部生物地球学科地理考古学研究室 pp.59-71
- 注22 土田純子2017『東アジアと百濟土器』同成社では馬韓発祥の百濟土器として把手付土器が挙げられている。注24 前掲注16
- 注23 前掲注18に同じ
- 注24 小田裕樹2016「古代宮都とその周辺の土器様相—「律令的土器様式」の再検討—」『官衙・集落と土器』2 奈良文化財研究所 pp.159-201